

自他一如

大塚 喜 一

堺市で關西聯合保育會が開かれた昨年十月十七日の前日、大阪郊外なる濱寺幼稚園を訪問した。今日こゝをお訪ねした一つの目的は子供達が樹登りをしているときいてその實景を見たかつたからであつた。果して子供達は猿の様に云ひたい程の脈々たる原始感情を湧き立たせつゝ松樹なる「大自然」の中に活潑に躍動してゐる。それを觀ながら主任の先生と話し合つた。先生は曰く

「樹登りは大人が案じる程危険なものではない。子供はチャンと知つてゐる。只、先生の見てゐないところでは登らないこゝにしてある。子供にこつてこんなよい運動はない」

話す中、夏の海の遊びのこゝになつた時先生は

「うきさへ持たさなければ大丈夫です」

と言はれた。このお言葉は小生の心胸に食ひ入つた。子供は海水の一如の境、それを妨げるものはその間に入る「うき」である。この妥協的な補助物は却て生きた直接の境を破るものとなる。これは決してこの水泳の一事のみではない。

設備や物は、幼兒の活動を誘發する様に活用せらるゝこゝもあれば、却て幼兒の生活の活機を滅殺し束縛するこゝもある。この死活は實に保母その人によりて定るこゝが最も多い。茲に於て吾人は

「材料は子供の中にある。設備は保母と子供の間に生れる」^①

なる語の眞意を悟るのである。

*

二人の母あり、互に一人の子を我が子なりと言ひ

争ひて法廷ていに訴へ出づ。裁判官はその一人の子の手を兩方より二人の母をして引かしむ。産みの母は子の泣くに驚き我知らず手を離せしが、他人なる女は力に任せて子の手を引きたるにより、その

何れが眞の母なるかが美事に判定せられたり」

去る十一月十三日蘆谷蘆村氏の「日本童話起原論」を聴く中に引用せられたるこの有名なる物語、勿論前から知つてゐたが、其日は次の様な事が考へさせられた。

眞の母の尊さは母子一體、自他一如の境にある。

然るにこの境を破るものは、利己心や便宜や結果をあせり求むる心、自分の思ふ様に相手を動かさむとする心である。この物語の如きは稀有の特例の如くであるが、日常我々が幼児と相交る中に、自分の小我の方へ幼児を引張らうとする態度、情念が動もするに働くこころがあり、その根性を省れば前の偽の母と同類である事、實に慚愧の至りであるを思はしめられるのである。

この物語は粗野にして本能のままなる母を戒めたものであらうか。又は似而非教育者に對する警告であらうか。

吾人は諸先輩を始め廣く讀者諸賢の聰明なる御教示を乞ふべく、この稿を草した次第である。

雪の朝

戸あけてよ、

プール御覽ごらんなさい

ブランコ御覽なさい

少し風が動いてる、

ブランコ、誰かのつてますわ

あ、雪がつもつてるんだわ

少し風で動いてる。

(「人形の耳」より)